

2020 年度

人権作品集

「人権」に関する標語選定作品 小学六年生

言ってみよう
勇気を出して
「やめようよ」



人権に関するポスター選定作品

小学6年生



人権に関するポスター選定作品

中学2年生

「人権」に関する標語選定作品 中学一年生

気をつけて
相手と自分
おきかえて

はじめに

名張市・名張市教育委員会・名張市人権啓発まちづくり事業推進会議では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を、市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生をはじめ市民のみなさまから、作文・標語・図画・ポスター・メッセージの作品を、合わせて九千八十一件応募いただきました。たいへん多くの方々から、人権作品に取り組んでいただいていることに対し、感謝を申し上げます。

提出していただいた作品の中には、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、そして学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられているものや、自分自身を振り返り、差別をなくしていくこうとする姿勢や意欲が伝わってくるものが数多く見られました。

この作品集は、応募いただいた作品の中から、作文八作品、標語十三作品、図画・ポスター二十作品、メッセージ五作品を選定し、掲載しています。本誌を、人権について考えるきっかけとするとともに、さまざまな学習の場でご利用いただければ幸いです。

なお、これらの作品の中から、図画・ポスターの一作品、標語の一作品を人権啓発用ティッシュに、そして、図画・ポスター八作品、標語五作品、メッセージ一作品を二〇二一年の人権カレンダーのデザインとして活用させていただきました。ありがとうございます。

目次

作文

【小学生の部】

○まほうのことば

○サッカーのこと

○一人ひとりを大切に

○全員が「大切」

○安心できる居場所

○差別をなくすために

【中学生の部】

○今こそ人権を見つめ直そう

学年

ページ

一年生 . . . 4

二年生 . . . 6

三年生 . . . 7

四年生 . . . 8

五年生 . . . 9

六年生 . . . 10

一年生 . . . 11

○「幸せな社会」へ

三年生・・・13

標語

【小学生の部】

・・・15

【中学生の部】

・・・16

メッセージ 「あなたの大切な人へ」

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

・・・17

図画・ポスター

【小学生の部】

・・・18

【中学生の部】

・・・21

作文【小学生の部】

まほうのことは

(小学一年生)

わたしは、しょうがつこうにゆうがくするまえは、ともだちができるかふあんでした。でも、にゆうがくしてすぐ、クラスのこが

「いっしょにあそぼう。」

ときそつてくれました。とてもうれしかったです。そして、クラスのともだちといっしょにドッジボールをしました。とてもたのしかったです。「いっしょにあそぼう」ということばでもだちができるのだなとおもいました。だから、わたしもひとりでいるこがいたら、「いっしょにあそぼう」とこえをかけたいなとおもいました。

わたしがじゅぎょうちゅうにけしゴムをおとしたら、ともだちがひろって、

「どうぞ。」

とわたししてくれました。ひろつてくれたのもうれしかったけど、「どうぞ」といってもらったのがすごくうれしかったです。そのとき、わたしもともだちに「どうぞ」といってみたいなとおもいました。そのあと、わたしはともだちがけしゴムをおとしたときにひろって

「どうぞ。」

とわたししてみました。すると、ともだちは、

「ありがとう。」

といつてくれました。すごくうれしかったです。だから、これからも「どうぞ」と「ありがとう」をいいたいなとおもいました。

じゅぎょうちゅう、もんだいがむずかしくてこまつて

いたら、ともだちが

「いっしょにやろう。」

といつて、そばにきて、

「こうしたらいいよ。」

とやさしくおしえてくれました。おしえかたがすごくわかりやすくて、うれしかったです。わたしもやってみたいなとおもいました。

あさ、がっこうにくるときにこけてかおにきずができてしまったことがあります。わたしはとてもはずかしかったです。でも、ともだちが

「どうしたの。」

「だいじょうぶ。」

としんぱいしてくれて、うれしかったです。じぶんもけがをしたりこまったりしているこがいたら、こえをかけ

たいなとおもいました。

「いつしよにあそぼう」や「どうぞ」などのことばは、「まほうのことば」だなとおもいました。どうしてかというと、じぶんもあいてもうれいきもちになるからです。だから、わたしも「まほうのことば」をたくさんつかって、ともだちともつとなかよくなりたいです。

わたしのまわりには、やさしいともだちがたくさんいます。ともだちがいるだけでいろいろなことをがんばれます。ともだちがいるとたのしいし、ところがほかほかします。わたしはみんなのことがだいすきです。ともだちっていいなとおもいます。わたしもみんなにやさしくして、ともだちともつとなかよくなりたいです。

サッカーのこと

(小学二年生)

ぼくは、休み時間に友だちとあそぶことが好きです。よくサッカーやドッジボールをしています。

ある日、二十分休みに六人でサッカーをしていました。さいしよは、いつも通りみんなでボールのけりあいをしていました。ぼくは楽しくてもつとしたいと思っていました。と中から、三人チームに分かれて、かんたんなゲームをしはじめました。とても楽しくて、みんな、だんだんむ中になりました。その時、ぼくは友だちの足に引っかかってこけてしまいました。とてもいたくて、なきそうになりました。けれど、なんんかの友だちは、こけたぼくを見てわらいました。

「大じょうぶ？」

としんぱいしてくれる友だちもいました。でも、わらわれたことがとてもかなしくて、むねがいたくなりました。もうあそびたくないとも思いました。いつもなかよくあそんでいる友だちなので、たすけてくれると思っていました。そんなもやもやした気もちのままサッカーをつづけました。

このことを学きゆう会でみんなに話しました。ぼくは、気もちを話した時、みんながしんけん聞いてくれたの

でうれしかったです。先生が、

「どうしたら、みんなが楽しくあそべるかな。」

と言って、みんな思っていることを紙に書きました。とてもしずかでした。はつびょうの時、ほとんどの人が

「こけたのにわらうのはおかしい。」

「大じょうぶ？とやさしく声をかけたほうがいい。」

と言ってくれたので、ぼくは、

「ぼくも友だちがこけたら、やさしくしたいです。でも、ぼくも友だちをきずつけてしまうかもしれないから気をつけたいです。」

と言いました。みんなうなずいてくれました。話しあいの後、すっきりした気もちになりました。みんなの前で話すことは、すきではなかったけど、話してよかったです。

この話しあいをして、ぼくは、これからだれかがこまっていたら、声をかけたいし、じ分も言ばに気をつけていきたいと思えました。みんなが楽しいと思えるクラスにしていきたいです。

一人ひとりを大切に

(小学三年生)

わたしは、二年生の終わりころに、いままではとてもなかよしだった子がきゆうにわたしの方にぶつかってきました。わたしは、自分からぶつかっていなくても、あたってしまったから、「ごめんね。」

と、言ったのにその子はむしして向こうに行ってしまいました。どうしたのだろうと思っていると、次は名前をよんでもむしして、よんでもむししてをくりかえされて少し悲しくなりました。そこで大親友の友だちに

「さい近いじわるされるの。」
と、言ったら

「わたしもされるの。」
と、友だちも言ったのでびつくりしました。

その友だちが

「先生と話し合おう。」
と、言ったのですがわたしは、

「それはやめておこう。」
と、言っていました。

なぜかという話し合っている時にいじわるをしてくる子にむししないでと言った後に、先生の前であんなこと言わないでくれると言われるのがこわかったからです。それでも友だちに「話し合ったらもうこんなことなくなるよ。」
と言われたので話し合うことにしました。

話し合ってからその子は、反せいして、
「もうあんなことはしないよ。」

と、言ってくれたのでわたしも話してよかったと思っていました。ところがまた、いじわるをいっぱいしてきて、そのまま三年生になってしまいました。大親友の子とクラスがはなれ、その友だちはいじわるをしてきた子といっしょになりました。

ある日、二人がわたしのところに来たので、
「なかよくなつたの。」
と聞くと、

「今までごめんねっていつてくれてその後はとてもなかよくなつたの。」

と言いました。今までいじわるしてきていた子がわたしにも
「今までごめんね。」

と、言ってくれて今では、とてもなかよく遊ぶようになりました。
「ごめんね。」という言葉はケンカをしてしまってもなかなかお
りできる言葉だと思えます。

わたしは、これからも一人ひとりを大切にしたらケンカなど
にならないと思います。

これからは、わたしもわる口を言わないようにしようと思
うけど、もしもケンカになってしまったら自分から、

「ごめんね。」
と、言うようにしたいです。

これから、人の気もちを考えたり、一人ひとりを大切にし
たりして、みんなとなかよくできるようにしたいです。

全員が「大切」

(小学四年生)

私は、自分の齒にコンプレックスがあります。私の友達は、そのコンプレックスのを受け止めてくれていて、今の私にとって一番相談できる大切な存在です。今までは、あまり自分のことに共感してくれる友達がいませんでしたが、四年生になってようやく共感し合えるそんな友達を見つけることができました。

その友達は、いやなことやなごみを真げんに聴いてくれます。秘みつを守ってくれたことやいっしょに経験したこと、助けてくれたこと、心配してくれたこと、笑ってくれたこと、応援してくれたこと、はげましてくれたことなど、たくさんありました。

このような大切な友達がいるからこそ、今の自分は楽しく学校に来ることができています。最近も自分のコンプレックスで悩んでいると、

「大丈夫。」

と声をかけて心配してくれました。そのことで私はとても心強く安心できました。こうやって私のことを気にかけてくれる友達が困っていたり、悩んでいたたりしたら、いっしょに考えて安心させてあげたいと思っています。そして、お互いに支え合っている友達関係を大切にしていきたいと思っています。この友達ができてから、今までの自分のことを思い返すことができるようになりました。

私が三年生の時、二人の友達をいじっていました。他にもおにごっこでおおを決めるとき、大勢の人で一人の子を責めてしまうこともありました。私が友達をいじっていたと気付いたのは、四年生の道徳の「いじりといじめ」という学習をしてからでした。三年生の時に、担

任の先生が言っていた言葉を思い出しました。それは、どんなことでも一人に対して二人や三人など大勢で責めるのはいじりからいじめにつながるということでした。それまでは、軽く感じていたいじりという言葉が、本当は重く感じなければいけない大切な言葉だと四年生になって気付きました。三年生の時に、私が言ってきた数々の言葉が、いじりもしくはいじめにつながる種を生んでいたのだなと思えました。過去のことはいまさら消えないからこそ、これからは自分が変わらなければいけないといつも心の中に思っています。もし私が、チクチク言葉を発してしまえば、心の中に、いじりやいじめの種が生まれてしまいます。私は、その種を絶対に生みたくありません。

そのように私が変われたのは、自分を見つめ直す時間が増えたことや人に対してやさしさを持つて接することができてきたからです。四年生になってある子が授業中にズボンにえんぴつを入れていたことがありました。それに気づいた他の子たちは、その子を大勢で強く責めるように注意していました。私は、その時に勇気をふりしぼって責めないように言いました。強く注意している子からいやなことを言われて泣いてしまったけど、分かってくれた友達がいました。今までの私ならいっしょに強く言っていたと思います。

これから、もし私の周りで相手を傷付けるチクチク言葉が出た時に、一人でもつらい思いをしないようにチクチク言葉を止められるようになりたいと思っています。そして、私からすすんで友達との関係をつないでいける人になっていきたいです。

安心できる居場所

(小学五年生)

私は、山口さんの話を聞いて、あることが分かった気がします。それは、安心して過ごせる居場所づくりが大切だということです。

私が幼稚園児の頃、女の子とお絵かきをしていました。私はその時、黒いペンしか持っていなかったのですが、そのままかいていると、いっしょにお絵かきしていた女の子に、

「えっ、なにこれ、まっ黒でこわい。」

と言われました。私はその時、ショックを受けていましたが、「あはは。」と笑いごまかしたのです。今考えてみると、なぜ言い返さなかったのか、もしかしたらあの時いっしょにいてくれたのはその子だけだったから、言い返したらさらに否定され、「いっしょにいてくれなくなってしまう。」「ひとりぼっちになってしまう。」と思っていたのだと気づきました。その時から、ちょっとだけ人をさけるようになりました。またいやなことを言われるのが、とてもこわかったからです。そんな日々の中、私を助けてくれたのが先生でした。先生は、私を遊びにさそってくれて、その先生もとても楽しそうに遊んでいたのだから、安心してみんなで遊ぶことができるようになり、とても楽しい日々に変まりました。その先生のこと、識字教室で字を教えるだけでなくみんなといっしょに学ぼうとした識字教室の先生の姿と重なりました。だから、識字教室に通っていた山口さんのお父さんが、識字教室

をすごく楽しみにしていた気持ちも分かる気がしました。私が一人だった時に、私のことを気にかけて友だちや先生が遊びにさそってくれたことは、山口さんのお父さんが病気で識字教室を休んでいた時に、仲間から手紙をもらってはげまされた様子とも重なりました。

そしてついに小学生。私は、新しい友だちをつくることにとても前向きになっていました。最初はなかなか友だちができなかったけれど、学校に慣れていくうちにどんどん友だちが増えました。私はとてもうれしかったし楽しかったです。今では、親友と言える友だちもできました。学校では、けんかもするけれど、いっしょにいてくれるとうれしくて楽しい気持ちになります。もし、前向きな気持ちで人に話しかけることができないままだったら、今の幸せはなかったと思います。

楽しみにできる居場所とは、安心できる居場所です。もし、友だちの中で、だれかが人をきずつける言葉を言ってしまったら、注意したいです。そして、もし、心がきずついている友だちがいたら、「大丈夫だよ。」と言ってよりそいたいです。友だちがいなかったら、友だちになって安心させたいです。でも、それをしていくためには自分の思ったことをもつと出せないといけません。本当はこっちはいいと思うことでも友だちの意見に合わせて違う方を選んでしまうことが多いからです。

今よりも安心して自分が出せて、自分がしていきたいことができるクラスにするために、同じ思いの友達と、そして最後にはみんなですんなりクラスを目指したいです。

差別をなくすために

(小学六年生)

わたしは、以前からいけないと思っけていても、相手に、「それは、いけない」といえないところがありました。

六年生になって、藤本さんのお話を聞いて人権について考えました。藤本さんは、人権についていろいろの人に伝える方法の一つとして、歌にしてみんなに知ってもらおう活動をしています。その中の「子牛のロウカウジー」という歌を聞いた時、わたしの経験に似ていると感じました。

一年生の時、わたしはこんなことを友だちから言われたことがあります。「Aさんは、アレルギーだから近づかないで」という内容のものでした。その時は、わたしは、まだ一年生ということもあり、アレルギーというのは何かということをししく理解していませんでした。わたしは、当時、おかしいなと思っけてもそのことについて何も言い返すことができませんでした。その時のわたしは、自分もぜんそくを持っているので、そのことが原因で避けられてしまうのではないかとドキッとしたことを覚えています。友だちがうそを言うとは思えないし、アレルギーだから近づいてはいけないという言葉だけで、それが本当のことだと信じてしまう自分がいました。でも、それでいいのかと思っけて自分もいて、考えても考えても分からなくてもやもやしていました。そんな時に読んだ本の中に、「みんな顔が違っけてように性格も違っけて、それってとても素敵なこと」ということが書いてありました。わたしは、それを読んで生まれつきもっている体のことや、その人がどうすることもできないことと避けたり、いじめたりするのはいけないと思っけて、避けるこ

とはしませんでした。

藤本さんの歌ってくれたその曲には、自分は自分、他の人と比べることなく個性を大切にという意味が込められていると思っけています。自分とちがうところがあることと避けることは間違っけてっていると確信しました。あのとき、Aさんを避けなくてよかつたところでも思っけて出します。

藤本さんは「招かれなかつたお誕生会」という歌も歌ってくれました。その歌の中の差別によってお誕生会にさそつてもらえなかつた孫の涙を見たときの「どんなするどい刃物よりわたしの胸を刺しました」という言葉が心に残っけています。部落差別はそこに住んでいるというだけで差別することです。何の根拠もなくうわさのみで住んでいるふるさとが差別を受けるのはとても悲しいことです。わたしは、それは本当におかしいことだと思っけていました。

藤本さんからお話を聞かせてもらつた後、いじめや差別をなくすことができるように、みんなで4コマ漫画をつくりました。「これって本当？」とうわさを信じていいのかということとを漫画にしているグループがありました。もし、あのとき、うわさを信じてAさんを避けていたらと思っけて恐ろしいです。わたしたちは、一人ひとりの違いを認めることができるように漫画をつくりました。生まれつき持っている体、住んでいる場所でだれかに何を言われたつてどうしようもありません。だから、わたしは、そのことで差別をしている人がいたら注意をして、困っている人のみかたでいられる立場にしていることができるようにしたいです。差別を残すのではなく、なくすことができるように、勇気をだして、おかしいと言えなかつた自分を、おかしいと言っけて自分の変えていきたいと思っけています。

作文【中学生の部】

今こそ人権を見つめ直そう

(中学一年生)

私にとっての人権は教室の中や、毎日の学校生活において感じるものでした。しかし朝日新聞の「人の間・コロナ禍の距離」の記事を読むと「死」に関わる人権について考えさせられました。三代男性は陽性判明後に亡くなった祖父と最後のお別れを制限され、死後の対面もかなわなかったのです。これまでも芸能人の訃報を伝える時、同じようなニュースがありました。あらためて遺族の気持ちを考えてみると、様々な人権問題が浮かび上がってきました。男性は感染予防に多くの人が神経を使っているため、周囲に祖父の死について話すことができませんでした。大切な家族の別れと向き合う権利をうばわれたのです。

この記事のテーマ「弔い」の意味を国語辞典で調べると「人の死を悲しみいたむこと」とありました。悲しみは分かち合うことで和らげていくことができると言われていますがこの男性のように節目になるはずの葬儀など行えず自分自身で悲しみを乗り越えるのは大変なことだと思えます。これまで当たり前に行われていた弔いには、大きな意味があったからです。

そしてこの記事で注目したいのは、宗教学と死生学の研究者による解説です。これまで天然痘、スペイン風邪、結核のような教科書でも学んだ感染症に対して、科学が勝利してきたので、感染症を恐れる時代は終わり長寿の世の中になりました。さらに近年は緩和ケアで死期の苦痛をコントロールできる時代です。コロナウ

イルスは誰も制御がきかず、死を見通す権利を与えてくれません。日本ではコロナウイルスによる死は隠さなければいけないと思われていて、残された家族の心も出すことができません。

こうして様々な権利を失くしていても、相手がウイルスであればあきらめてしまう事ばかりです。ウイルスに抵抗できなくても、「死」を差別せず弔う気持ちは堂々と表現できるように変わっていく日本になればいいと思いました。

また別の日のテーマは「名前」でした。日本では一部の有名人を除いて、コロナウイルスで犠牲になった千人以上の名前は公表されていません。東京都では個人のプライバシーを考え、実名の発表は議論にないとしています。一方、アメリカでは五月、ニューヨーク・タイムズ紙が犠牲者千人の名前を一面から書き連ねています。死者は数字で表すだけでなく、それぞれの名前を持っている個人であると強い主張が感じられました。この様な人権に対するとらえ方は、日本とは正反対ではないでしょうか。民俗学者の説明によると、日本は「あえて名前で呼ばない文化」が昔からあり、上司を役職名で、上級生を先輩、家族であっても役割名で呼ぶことが多いようです。このような文化では、犠牲者として実名を公表すると抵抗感が生まれ、悪者や攻撃を受ける危険がおこるかもしれないと考えられます。個人としてより存在を数字のようなデータにして匿名にすれば、安心する人がたくさんいるのです。

このことから、犠牲者について公ではどう表すかは、その国や地域の文化によって人権の尊重のとらえ方が違うのだとわかりました。

「弔う」人権を得られない人がいる一方で、「名前」についての人権を守るためには公にしない文化がある。この二つは反してい

るようで、どちらも間違っていないと思います。同じテーマの記事でも読む人によって受け止め方が変わるように、人権は決まった正解がない場合もあると考えられるようになりました。

メディアは毎日のようにコロナウイルスによる正解・不正解を議論しています。不注意で感染した人や、大勢のクラスターを起こした場合は行動など詳しく調べたり、まるで犯人について報道している様になりました。個人の情報は周りの人やうわさからSNSを使って全国へ広がっていきます。感染拡大を防ぐことが大切なのか、犯人にならないことが大切なのか分からなくなりました。人権を侵害される人がいなくなるためには、早くワクチンができて、恐怖心を少なくしなければいけないと思います。小学六年生で参加した「いじめ防止サミット」で、「自分が傷つくのを恐れるあまり相手を攻撃する心理がある」と教えてもらいました。私はいじめの問題とコロナウイルスの問題は違うものだと思ってましたが、一人一人の人権を守ることは教室でも世界の国々でも、自分自身が強い心を持つことが解決へつなぐると感じました。

「幸せな社会」へ

(中学三年生)

「幸せな社会」とは具体的にどんな社会なのでしょう。点字ブロックやスロープなどが整備されている、障がいをもった人がどこにだって行くことのできる社会。困っている人がいたら誰かがすぐに駆け寄り、助けることのできるような社会。同性や異性という隔たりは全く関係なく、自分の好きな人と、自分の着たい服を着て、自分のいたい姿で堂々と歩ける社会。私は、誰でも自分のありのままの姿や「自分」を自由に表現できるような、開放的で暮らしやすい社会こそが「幸せな社会」だと思います。そしてこれからそんな社会を作りあげていくのは、若年層である私たちです。しかしみなさんがいざ街中で、困っている小さな子どもやお年寄り、外国人の方を見かけたとき、すぐに助けることができますか。

そのとき私は、友達と近くの公園のベンチで休憩していました。私たちが話していると、前方の遊具で遊んでいた女の子が遊具から落ちてしまいました。その子のお父さんはちょうどその場を離れていて、誰も気づいていないようでした。それを二人で見ている私たちは、顔を見合わせて走り出しました。まずその子の目線にかがみ話しかけると、ほとんど泣き顔のまま答えてくれました。すると気づいたお父さんがすぐさま駆け寄り、何があったのかその子に尋ねました。女の子はお父さんに抱っこされると安心したのか泣いていたので、私たちが経緯を説明すると、その子のお父さんはお礼を言ってくださいました。この経験から私は、困っている人を助けることで、すこく心が清々しくなると気づきました。そして何よりも、女の子が無事でよかったです。自分たちが行動

したことで、その子が少しでもほっとしてきていたら嬉しいです。

そんなある日、私が曾祖母から聞いた話です。曾祖母は散歩することが好きで、近くの小さな百貨店やスーパーマーケットによく買い物に行きます。曾祖母がいつものように買い物をしてきた帰り道でのこと、曾祖母とすれ違った小学生が、荷物を持つのを手伝ってくれたそうです。私はその話を聞いたとき、びっくりしたと同時に、その小学生の行動にとっても勇気があると感じました。私だったら一人でいるときに話したことはない大人の方が困っていても、すぐに声をかけられる自信がないからです。「もし、はねのけられてしまったらどうしよう。」という不安な気持ちに「助けてほしい。」という意志が負けてしまうと思います。しかし、その話をしているときの曾祖母はとても嬉しそうでした。人を助けたら助けられた人を幸せにできるということに、改めて気付かされました。だから心の中でどれだけ葛藤しても、最後には勇気をもって人を助けられるようになりたいです。

困っている人に声をかけることには、大きな勇気が必要です。もしこれが難しくても、私たちには「幸せな社会」づくりに貢献できる小さなことがたくさんあるはず。例えば、他人を区別しないことです。世界にはさまざまな文化や宗教、言語があります。また、多様な服や言葉遣い、顔立ち、その人ならではの癖や性格もあります。私たちは無限のように続くそれらの個性を、それぞれ持っています。自分と他の人が違うことはあたりまえのことです。だから、差別は絶対にあってはならないことです。「違っているから」「自分と違って」という気持ちが多岐の差別問題を招いています。私たちの身近では、その気持ちがいじめを引き起こす

きつけかけになつています。一人一人が世界にはたくさん、いろいろな人々がいるということを理解して行動を見直すことが、みんなの人権が守られる「幸せな社会」づくりにつながると思います。

私が冒頭で述べたように、「幸せな社会」づくりには、私たちが行動を始めることがとても重要です。お年寄りやマイノリティ(少数派)といわれる人、今辛い思いをしていて生きにくいと感じている人などは、現代社会で全員が幸せだとは言えないと思います。このような社会ではまだ、完璧に人権が守られていません。誰もが胸を張って「今、自分は幸せだ。」と言える社会にすることは、きつとすぐには達成できません。しかし、このような考えを心の中に少しでも持つている人は、とても多いと思います。自分の中に行動したいという気持ちがあるのなら、勇気を出して実行に移してみましよう。そんな人たちが一人一人行動していけば、それはとても大きな力になり、「幸せな社会」にもつながります。私はいくつかの経験を通じて、自分から行動することがいかに大切か学びました。この貴重な経験から学んだことを、周りの人にも発信していきます。それが私にできることです。「幸せな社会」づくりのために……。

標語

【小学生の部】

学年

- ・ いじめはだめだ　　そう思うだけじゃ　　変わらない　　五年生
- ・ ありがとう　　うれしい言葉　　返したい　　五年生
- ・ その言葉　　言っ　　ていいかな　　考　　えて　　五年生
- ・ 確かめて　　うそと真実　　情報　　を　　五年生
- ・ 見てるだけ　　それでもいじめに　　かわりない　　六年生
- ・ 助けたい　　その考えを　　行動に　　六年生
- ・ 世界中　　十人十色　　かがやいて　　六年生
- ・ 言っ　　てみよう　　勇　　気を出して　　「やめようよ」　　六年生

【中学生の部】

- ・人間は 個性があって 当たり前
- ・気をつけて 相手と自分 おきかえて
- ・見てみぬふり こうかいするのは 自分だよ
- ・その言葉 相手じゃなくて 自分に言える？
- ・みんなの個性が活かせる社会へ



学年

一年生

一年生

一年生

二年生

三年生

メッセージ「あなた大切な人へ」

最優秀賞

「お母さん」へ

シングルマザーとして子ども3人をひとりで支えてくれているお母さん。いつも3人のために一生懸命働いて、疲れてるはずなのに笑顔をやさしく私たちに接してくれてそんなあなたに私はいろんな面で助けられ支えられてきました。そんな私ももう高校生。もう大丈夫、次は私があなたを支えていく番です。
(高校1年生)

優秀賞

「お母さん」へ

いつもありがとう。家を出て柔道をするために下宿した私にとって、心の支えはいつもお母さんでした。けがで手術をして入院した時、遠い病院まで毎日来てくれたよね。お母さんがそばにいてくれることがなよりの痛み止めでした。これから立派な理学療法士になって、たくさん親孝行します。だいすき。
(高校3年生)

「父親」へ

仕事でいつも疲れているのに私の相談や話を聞いてくれてありがとう。思いつめてしまったときに相談にのってくれてアドバイスをくれるから私はとても感謝しています。いつも明るく頑張っているのは父の言葉があったからです。これからも父からもらった言葉を大事にして頑張っていきたいです。
(高校2年生)

「家族」へ

母子家庭でしかも、病気もあって自分のことだけでも大変なのに僕をここまで育ててくれてありがとう。母さんはいつもごめんねと言うけれど僕は母さんのところに生まれてきて幸せです。もう僕も高校生です。あたりまえのことあたりまえにできるそんな人になれるようにします。みててください。
(高校1年生)

「医療現場の方々」へ

先日、父が緊急ドクターヘリに運ばれた際パニック状態でどう動いたらいいのか分からなかった私達を優しく声かけをしてくださりありがとうございます。そして、父の命を救ってくださりありがとうございます。あれから父はすごく元気です。次は私が誰かの命を救う医療現場の人になります。
(高校1年生)

《小学生の部》



1年生



1年生



1年生



2年生



1年生



3年生



3年生



4年生



4年生



4年生



5年生



6年生



6年生



6年生



6年生

《中学生の部》



2年生



3年生



2年生



3年生



3年生

人権尊重都市宣言

すべての人々の人権が尊重される自由で平等な社会の実現は全世界共通の願いである。

しかしながら、現実の社会生活においては人権が侵害される事象が依然として存在しており、これを解消することは私たち全市民に課せられた責務である。

よって、当市議会は、あらゆる差別を撤廃し、すべての人々の人権が保障される明るく住みよい地域社会を実現するため、ここに人権尊重都市宣言を決議する。

平成3年3月27日

名張市



名張市子ども条例に基づく「ぱりっ子会議」
考案キャラクター なばりん

—人権作品集—
2021年1月発行
名 張 市
名張市教育委員会
名張市人権啓発まちづくり事業推進会議

この冊子は再生紙を使用しています。